
1人の兄貴と性格違いの4人姉妹——!? 5年後の兄妹

黒兎 季茄枯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1人の兄貴と性格違いの4人姉妹——！？ 5年後の兄妹

【Nコード】

N5146Q

【作者名】

黒兎 季茄枯

【あらすじ】

あれから5年が過ぎた、だけど兄は事故に合い記憶を失ってしま
う！？・・・これからどうするの！妹達——！！！！

— 自己紹介 — (前書き)

またまた応援よろしくお願いします！

—自己紹介—

あの物語から5年後。

兄貴も妹も幸せに暮らしているのだろうか？・・・。

長女

名前：桜宮樹姫さくらみやじゆき

年齢：22歳

性格：優しい、ちょっとお説教さん？

その他：今も兄貴の事が大好き。

一言：皆さん、お久しぶりです！また応援よろしくお願いします^^

次女

名前：桜宮空姫さくらみやそらぎ

年齢：21歳

性格：大人しくなった。

その他：女王様系の口癖はちょっとしか出なくなった。

一言：あら・・・じゃなくて、お久しぶりです、これからもよろしく

お願いしますわ・・・違うー！

三女

名前：桜宮蓮佳さくらみやれんか

年齢：20歳

性格：口悪、今でもツンデレ。

その他：兄貴とはあんまり会っていない。

一言：はあく・・・またあの兄貴の面倒か？・・・本当にだるい。

四女

名前：桜宮桂さくらみやかづひ

年齢：19歳

性格：ヲタク「腐女子、甘えるようになった。」

その他：兄貴と一緒に住んでいる？、ヲタクから腐女子になった。
一言：お初ゝまんまよろろゝ

長男

名前：桜宮誉雅さくらみや ひとみ

年齢：23歳

性格：慌てん坊。

その他：何かの原因で記憶が無くなる！

一言：これからよろしくな！変な妹だらけだけどよろしくな^^

作：これからよろしくね！

—自己紹介—（後書き）

次回もよろしくね！

【1話 兄貴の記憶】（前書き）

第二期つて所ですかねw
w
よろしく願いします^^

【1話 兄貴の記憶】

「お兄ちゃまいつてらしゃい〜。」

「行つて来る。」

長男の誉雅と四女の桂。

誉雅が仕事に行った。

ドカ———— キュッ！ドンッ！

何かがぶつかった音がした。

「外ですか？」

桂が外をのぞいた。

「!?!?・・・。」

桂は慌てて外に出た。

「お兄ちゃま！お兄ちゃま！起きてくださいです！あつ救急車！」

桂は携帯で病院に連絡した。

誉雅はすぐに病院に運ばれた。

「桂！」

久々のご登場の、

「お兄様は！お兄様はどこですの・・・ちが・・・か!?!?・・・。」

次女の空姫は桂に顔を近づけて怖い顔をして言った。

「空姫、そんなに桂をイジメちゃ駄目だよ^^;」

長女の樹姫が止める。

「何であたしまでが呼ばれるんだか！」

三女の蓮佳はちよつと怒っていた。

「ご家族の方ですか？」

「はい！」

4人は自信ありげに言った。

「お兄さんは軽い傷で済みました、壁に頭が当たって気絶されたのでしょ。」

「良かったです。」

空姫が安心した。

そして3人は病室に戻ったら誉雅がおきていた。

「お兄様！」

空姫が抱きついた。

「良かったです！本当に^^大丈夫ですか？」

空姫は心配した。

「・・・あなたは誰ですか？・・・病室間違えましたか？」

「えっ？・・・」

空姫は驚いて、冷や汗をたらした。

「お兄様！何言ってるのですか？・・・」

空姫は動揺した。

「あつすいません、多分病室を間違えました。すいません^^」

樹姫は謝った。

「多分記憶障害でしょう。」

先生が言った。

「記憶喪失って事ですか？」

「はい、まあいろいろしていたら思い出しますよ^^」

空姫と樹姫は病室に戻った。

「桂ちゃんは明るいね・・・」

「お兄ちゃまだって優しいよ^^」

「お兄ちゃまって・・・僕が？・・・」

「桂のお兄ちゃまなんだよ誉雅さんは^^」

「そっか・・・」

誉雅は桂の頭を撫でた。

「誉雅さんは記憶障害なんです。」

「そうなんですか・・・」

「誉雅さんは私達のお兄さんなんですよ^^。」

「そうですか^^。」

「思い出すように自己紹介しますね^^」

長女の桜宮樹姫ですよろしくお願いします^^」

「次女の桜宮空姫ですわ・・・ちが・・・です!」

「三女の桜宮蓮佳!・・・。」

「四女の桜宮桂だよ^^」

妹四人が自己紹介した。

「そして、お兄ちゃまの名前が桜宮誉雅だよ^^」

「誉雅って名前なんですか・・・。」

「名前も覚えてないのか?」

「はい。」

「まあ!地味地味思い出して行きますよ^^」

「うん^^。」

【1話 兄貴の記憶】（後書き）

次回よろしくお願いします！

【2話 渡さない】（前書き）

どぞー！！！！！！！！

【2話 渡さない】

俺は4人の女の子に引き取られた。
病院も無事退院した。

だけど4人の女の子は普通じゃない事が分かった――。

「お兄様！食べさせてあげます！はいアーン^^」

「えっと……（汗）。」

「空姫お兄ちゃんが動揺どうぶつしてるじゃない！」

「……………」

「お兄ちゃま、遊ばー^^」

桂が誉雅の手を引っ張る。

「桂！お兄様は先に食事の済ませないといけませんのよ！」

空姫は女王口調を出してしまった。

「空姫口調、桂もご飯早く食べて。」

「……………」

樹姫が桂に言う。

「私はお兄ちゃまと今から遊ぶの！だからほつといて！」

「桂！何よ！あんたね！ご飯くらいちゃんと食べれるでしょう！」

「何です……自分達は出て行ったくせに、今頃姉気取りはやめてください！」

「！？」

桂は誉雅の手を引っ張って自分の部屋に連れて行った。

「樹姫も言いすぎだ。」

蓮佳はそう言って家から出て行った。

「蓮佳も変わりましたね。」

空姫もどっかに行った。

「……私は一人なの？……………」

「喧嘩しちゃ駄目だよ……桂ちゃん。」

「いいの！お兄ちゃまは私の事どう思ってるんですか？」

「何？いきなり！／＼」

「聞きたいのです、お兄ちゃまの気持ちを……。」

桂はちよつと暗かった。

「大丈夫、家族？として好きだから^^」

「あつ……お兄ちゃま！大好き！」

桂は誉雅に抱きついた。

絶対誰にもお兄ちゃまを渡さないです……。

「お兄ちゃま、目をつぶってくださいな^^」

「えっ何で？」

「お願いです^^」

「分かった。」

誉雅は桂の言うとうりに目をつぶった。

桂は、

誰にも渡しませんです……絶対……。

パチッ

「！?……。」

誉雅は思わず目を開けてしまった。

桂の唇と誉雅の唇が重なっていたからだ。

「桂ちゃん！？／＼／＼／＼／」

「誰にも渡しません！絶対に！」

【2話 渡さない】（後書き）

次回よろしくね！

【3話 四女はヤンデレ素質がある?】（前書き）

どうぞ……!!……!!……!!

【3話 四女はヤンデレ素質がある?】

「お兄ちゃま、桂って呼んでください。」

「桂?.....」

「そうです、もうお兄ちゃまは私の物です、だからお兄ちゃま私の事を好きになってくださいませ。」

「えっ?.....」

桂はちよつと興奮していた。

「ちよつと何してるのですか!」

後ろから空姫が桂を止めた。

「なんですか?邪魔しないでください。」

桂はちよつと怒っていた。

「はあ.....お兄様、部屋に行つててください。」

「おう。」

誉雅は自分の部屋に戻った。

「何の真似ですか?お姉ちゃま。」

「あなたね暴走しすぎですよ。」

「あなたには関係ありません。」

「ちよつと可愛くなりなさいな。」

「お姉ちゃまこそ可愛くなったらどうですか?」

桂と空姫の姉妹喧嘩が始まった。

「桂、あなたね一番お兄様の近くに居たからって調子に乗るのにもほどほどにしたほうがいいですよ。」

「何ですか?自分は彼氏居るくせにもう結構もするのでしょうか?なら帰ってください。」

「本当に、あなたは可愛くありませんわね!」

「別に可愛いとか思えなんていつてませんけど。」

「あら?そうですか、お兄様の事はあなたより、私の方がご存知なのよ。」

「じゃあ・・・聞きますけど・・・」

桂は急に冷静になった。

「何ですか?!」

「お兄ちゃまにキスした事あります?」

「!?!」

「私はしましたよ、さつき^^」

桂は笑顔だった。

「あなた何様ですか?」

「私はね、あなた達が邪魔なのよ。」

「えっ?。」

「私は、お兄ちゃまに近づいている邪魔な蠅^{はえ}を排除^{はいじょ}してたの

あなた方がいない間!お兄ちゃまはすぐにもててしまう、だから排除しないと

私の物にはならないでしょう?。」

「あなた本当に愛と言う物がほしいのですね。」

桂はちよつと興奮と言う物に覆われていた。

「もしも、お兄ちゃまに好きな人が出来たら、力づくでもいや・・・

殺してでも!渡さない!お兄ちゃまは誰にも渡さない!!!!!!

「!!!!!!」

桂の想いが少しずつ、少しずつ、黒くやんできていた・・・。

【3話 四女はヤンデレ素質がある?】（後書き）

短くてすいません、あんまり思いつきませんねww
次回よろしく願いします^^

【4話 一番にはなれなくて。】（前書き）

どぞー！！！！！！！！

【4話 一番にはなれなくて】

「お兄ちゃま！買い物にでも出かけましょう！^^」

あれから桂は空姫達とは口を聞いていなかった。

「あつ・・悪い今日は、樹姫と記憶を思い出しに行かないと行けないから、

また今度な！桂！」

誉雅は走って樹姫の所に行った。

「!?!?!」

樹姫も楽しそうで誉雅も楽しそうに笑っていた。

「・・・渡さない!・・・絶対に!」

桂に中で何かがはじけた。

ドンッ！

桂は、樹姫を突き飛ばして誉雅の隣にたった。

「お兄ちゃま！私もお兄ちゃまの記憶が戻るお手伝いをしますです

^^」

「おう・・って樹姫大丈夫か？」

「うん^^。」

樹姫は立った。

「じゃあ行こう^^」

「おう^^」

「・・・・。」

どうして、お兄ちゃまは私の時は笑ってくれないのですか?・・・・。

そしていろいろ回ったが、記憶は思い出さず。

「お兄ちゃま!・・・・。」

「誉雅!?!?!?!?!」

「えっ!?!?!?!」

誉雅の目の前に来た女の人は柏はくだった。

「誰？」

「お兄ちゃんの元恋人の柏さんだよ^^」

「あつ！・・・。」

「お兄ちゃん今記憶が無くて、すいません。」

「いいの^^誉雅元気そうだよかった^^」

柏はあの時よりも優しく綺麗で美人だった。

「あつ！・・・心配してくださってありがとうございます。」

「ウフフツ・・・敬語だなんて似合わないわね^^」

「柏って呼んでましたか？俺？」

「うん^^。」

「そうですか。」

「うん！^^だけど考え方はちょっとだけ幼稚だったかな？^^」

「そうですか・・・アハハハハハハッ・・・はあ・・・。」

幼稚とか超「恥ずかしいじゃん！記憶の合った俺ってどんなのだよ

！！！！！！！

「でよ・・・。」

「えっ？」

「邪魔しないでよ！お兄ちゃまは私だけの物なのに！あんた達邪魔なんだよ！

もう邪魔しないでよ！」

「桂？」

ポタンツ・・・。

桂の目からは大粒の涙が溢れていた。

「もういや・・・お兄ちゃまは私だけの物なのに・・・私はお兄ちゃまといて楽しいのに・・・

お兄ちゃまは全然私といても笑ってくれない・・・なんで何で！
パシンツ！

柏が桂の頬を叩いた。

「いい加減にしなさい！あなたね、そんなに誉雅が欲しいんだった

ら！

自分の気持ちをすっかり本人に言わないと駄目でしょう！

それで誉雅が話を聞いてくれなかったら文句でも何でもいいから言うの！それが恋なのよ！」

柏は桂に説教をした。

「うう．．．うわああああああああん！！！！！！！！！！！」

桂は大声で泣き喚いた。

「柏さん泣かさないでくださいよ！」

樹姫は耳を塞いで言った。

「！？．．．。」

「悪かったな．．．。」

誉雅は桂をぎゅっと抱きしめた。

「うう．．．．。」

「よしよし。」

「本当に．．世話が焼けるね。」

「アハハハハッ。」

「．．．．バ力だな．．．。」

【4話 一番にはなれなくて。】（後書き）

次回よろしく！

【5話 後】（前巻より）

じぞー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

【5話 愛】

いつものように、楽しかった、昔は・・・・・・・・。
今は楽しいのかも感じれない・・・・・・・・。
いつまでも兄貴に甘えてなんて居られない・・・・。
そんなのだったら・・・・まるで・・・・あたしがバカみたいだし・・・・。

トンツトンツ

誰かが蓮佳の部屋のドアをノックした。

「ん？何だ？」

「ご飯だよ」

「分かった、すぐ行くから待ってる。」

「はいはい」

いつもこんな会話で終わる、まあ別に家族と仲良くしようとは思
ってないしな。

カチャンツ！

突然ガラスが割れた音がした。

「はあ・・・・・・・・。」

「大丈夫？蓮佳！」

「うん、皆食べていいよ。」

「うん、怪我はしないでね。」

「おう。」

素手でガラスの破片を拾ったが。

「あ・・・・・・・・。」

ガラスの破片で指を切ってしまった。

当たり前か・・・・切れるのも・・・・。

「蓮佳・・・お兄ちゃん呼んできてくれない？」

「分かった。」

「兄貴の部屋の前」

トンツトンツ

「おい兄貴さつさと起きろよ。」

蓮佳はノックして普通に入った。

誉雅は寝ていた。

「はあゝ・・・世話やける。」

「ん？」

誉雅が目を覚めた。

「お前この部屋で何してんの？」

「お前を起しに来た。」

「あゝそう。」

「はあゝ・・・あたしちよっくら出かけてくる。」

「はいはいゝ」

蓮佳は出て行った。

「はあゝ・・・寒い・・・。」

季節冬・・・かあゝ・・・。

「蓮佳。」

「!?!?!?!?」

蓮佳は驚きながら後ろを向いたけど誰も居なかった。

「気のせいか・・・。。。」

蓮佳はちよつと暗くなった。

「蓮佳お姉ちゃまどうかしたの？幼い時より暗くなりましたね。」

「あゝこれって桂にもお兄ちゃんには言わないといけないんだけど。」

「そうですね、言わないと何も始まりませんね。」

樹姫と空姫は暗くなった。

「蓮佳の付き合っていた人いるじゃありませんか。」

「えつと幼い時付き合っていたって言う？」

「うん、その人ね・・・蓮佳に虐待をして、自殺したんだよ。」

「えっ・・・・・・・・。」

「藍……会いたいよ……。」
ポタンッ……。

【5話 愛】（後書き）

次回もよろしくです！

【6話 本当の気持ち】（前書き）

ドゾ！！！！！！

【6話 本当の気持ち】

「ただいま。」

蓮佳が家に帰ってきた。

「おかえり^^蓮佳、どこ行つてたの？」

「公園とかいろいろ、散歩してた。」

「そう^^寒かった？」

「うん、結構寒いよ。」

「うん^^ありがとう。」

何だ、皆あたしに動揺してる?・・・まあいいけど。
ドンツ!

蓮佳は階段の所で誰かとぶつかった、そして蓮佳が階段から落ちそう。

パシッ!

「悪い、蓮佳よそ見してた。」

誉雅が蓮佳の手をつかんだ。

「ノノノノ別にいいけどさ!さつさと引き上げろよ!ノノノノ」

「あつ・・・悪い。」

誉雅は蓮佳を引っ張った。

「はあ・・・危ないノノノノ」

「悪いな。」

「てか兄貴、記憶無いくせに何でそんなに普通なんだよ。」

「こんな性格じゃないと、皆心配するし、素直じゃないとな^^」

「!??・・・。」

蓮佳は立ち上がって、自分の部屋に戻った。

「蓮佳?どうかしたのか？」

「・・・・。」

蓮佳の部屋からは何も聞こえなかった。

「まあいいけど。」

誉雅は1階に行った。

「蓮佳の部屋」

「自分の・・・気持ち・・・素直・・・はあ・・・全部当てはまっ
ないし・・・。」

蓮佳は一人でつぶやいていた。

トンツトンツ・・・ガチャツ。

「蓮佳？」

誉雅が蓮佳の部屋に入ってきた。

そしたら、蓮佳は布団も着ないで寝ていた。

「！？・・・。」

パチッ

「ん？・・・。」

蓮佳が起きた。

「！？・・・お前何してんだよ！！！！！！！！！！」

蓮佳は大声で怒鳴った。

「お前を呼びに。」

「はあ！？・・・何で／／／／／／／／／／」

蓮佳は顔を真っ赤にして聞いた。

「お前と一緒にいるために！」

「！？／／／／／／／／／／／／／／／／」

蓮佳は耳まで赤くなった。

「お前何考えてるんだよ！」

「えっと、蓮佳と一緒にいる時間のこと？」

「うるさいな！はあゝ分かったよ！行くから用意しろ。」

「もうしたから、行こう^^」

「！？／／／／」

そして二人は外に出た。

「寒い！」

「こんなので、弱みを言うな、男だろうが！」

「うう・・・ごめんなさい——」

「はあゝ・・・で本当はあたしを連れてきたのはなぜだ？」

「ばれてましたか？」

蓮佳は真面目になった。

「お前さ、素直になったら？」

「はあ!？」

「だってお前まだ、昔のこと引きずっている。」

「!？・・・そんな事お前に関係・・・。」

「あるから!言ってる!」

「!？・・・。」

蓮佳は動揺した。

「お前もいつまでも意地張ってるなよな。」

「!？・・・意地なんて張ってない!!!!!!!!!!!!!!」

蓮佳は怒った。

「しょうが無いんだよ!あたしにはもう生きるすべなんて無い!

最大の大切な人を失ってどう生きろって言う!今でもずっと寂しい!

虐待受けてきたけど!絶えてきた!それは藍が大好きだったから

!

「!？・・・。」

ポタンッ・・・。

蓮佳の目からは涙が溢れていた。

「いつも、いつも!毎日酒にまみれて虐待!だけどそれでも耐えてきた!

あたしの事大切にしてくれる人は藍だけだもん!誰もあたしの事はどうでもいいって思ってた!

あたしは藍が死んでからずっと!藍に会いたいと願いつけた!

自殺だっと思ってしまった!けど怖くて出来なかった・・・。」

蓮佳は自分の気持ちを言った。

「ほら、自分の気持ちいえるじゃんか^^」

「!？・・・お前もバカだろう・・・。」

『
藍・あたしは・あなたにもう一度会いたいよ・・・。
』

【6話 本当の気持ち】（後書き）

次回よろしく！

【7話 出来事】（前書き）

どうぞ……！！！！！！

【7話 出来事】

「ただいま」

「ただいま。」

誉雅と蓮佳が家に帰ってきた。

「おかえり〜!？」

「樹姫、皆をリビングに呼んでくれるか？」

「あつ・・・うん。」

そして全員がリビングに集まった。

「話があるんだ、あたしと藍にあった出来事を話すよ。」

「うん。」

皆真剣だった。

「ただいま。」

「おかえり、どうした？元氣ないけど？」

「別に。」

「藍？」

ガッ！

「あつ・・・。」

藍が蓮佳の手をはじいた。

「触るな！」

「あつ・・・。」

「なんだよ！お前はいいよなあー！いつも、いつも！暇なことでも少しは俺の気持ちも考えろ！」

そして藍は蓮佳に暴力を振った。

「はあ・・・疲れた。」

蓮佳はそれにも絶えてきた。

それは藍の事が誰よりも『好き』だったからだ、いつものように暴

力を受けても

それを耐え抜いてきた、いつもと同じ毎日、絶対に変わることは無いけど

あたしの人生は変わってしまった。

兄貴が記憶をなくしたと聞いてその電話をしている時に。

「お前！男と電話してんだな！」

「違う・・姉貴と電話してるんだよ！藍！信じてよ！」

そして藍は電話をきって、蓮佳に暴力を振った。

「藍・・悪いって・・ごめん！・・だからやめて！・・お願いだから！」

蓮佳はずっと藍を信じてきたけど、もう蓮佳も限界を超えていた。
「ハア・・ハア・・藍・・もう・・あたしの事なんか・・必要ないよね？・・。」「

蓮佳は自殺をしようとしたけど。

トンッ！

蓮佳は包丁を落とした。

「怖い・・やっぱりあたしには出来ない！・・・あたしはいつまでも耐えるしか。」「

蓮佳は死ぬと言う『恐怖』に負けた。

「藍、おかえり^^」

蓮佳はいつも藍の目の前では笑顔で微笑んだ。

「ただいま。」「

藍はいつも蓮佳の笑顔を見て、いつも落ち着いていた。

だけどいつも突然、暴力を振ってきた。

いつも耐えてきた、それは藍の顔を見て分かる。

いつもあたしを殴る時の藍の顔はとても悲しそうで寂しそうな顔だったから。

ただどある日突然――。。
ガチャッ。

「藍ただいま、いる？藍？」「

蓮佳はリボングに来た。

「!?!?・・・藍!・・・。」

藍は刃物で刺されて死んでいた。

「藍!藍!藍!」

警察に通報しても警察は自殺だと言った、しかも机の上には、私宛の手紙が置いていた。

蓮佳へ

今まで暴力を振ってごめんな。

俺素直じゃないから、暴力で何もかも解決しようとしていた。

悪かったな、いつまでもお前を苦しめて。

俺は多分お前の嫉妬してたと思う、誰かといえるだけで

俺はイライラモヤモヤする。だから、今まで暴力を振って悪かった。

けどもう苦しまなくていいよ、自由に生きろよ。

藍。

ポタンツ・・・・。

「藍・・・藍・・・藍・・・いや・・・会いたい・・・会いたいよ・・・・。」

└

蓮佳の目からは大粒の涙が零れ落ちていた。

「うう・・・藍・・・ウわああああああああん!!!!!!」

蓮佳は泣いて泣いて泣きまくった。

そして数日、兄貴が記憶をなくしたと聞いて、実家に帰ってきた。

そして、兄貴に自分気持ちを言ったら、すつきりした。

ポタンツ・・・・。

「あつ・・・悪い!・・・何泣いてるんだろっな!・・・もう終わった話なのにさ・・・・。」

蓮佳の目から大粒の涙が零れ落ちていた。

「泣けよ!泣けばいいだろう!大声で!そんなの思い出したら誰だ

って泣きたくなるわ！」

誉雅が蓮佳に怒鳴った。

「うう・・・お前も・・・バカだろうが・・・。」

蓮佳は誉雅に包まれ大声で泣いたそうです。

【7話 出来事】（後書き）

次回もよろしくね！

【8話 次女の点滴&ライバル?】（前書き）

どぞ!!!!!!!!!!!!!!

【8話 次女の点滴&ライバル?】

ピンポン

朝から誰かが家に来た。

「桜宮空姫様はいますか?」

家に来たのは、お金持ちのようだった。

「いますけど。」

「じゃあお邪魔します。」

樹姫がいると言うと勝手に家に入ってくる。

「空姫!」

「あっ!?!?・・・。」

空姫は驚いていた。

「さあ!結婚しよう!」

「却下します。」

「ガーーーン」

空姫はキツパリ断った。

「なんだよーそんなに照れなくてもいいじゃないかー。」

「別に照れていませんわ!」

空姫の女王様系が出た。

「出た!女王様系の空姫様!」

「邪魔。」

蓮佳が寝起きでちよつと機嫌が悪かった。

「お姉ちゃま!ご飯は?」

「ん?ああゝ普通の和食だよ。」

「そうなんですか^^でこの方たちは?」

「空姫の知り合いつて所かな?」

「そうなのですかー」

「な、な、なんと美しい!美しい姉妹ですね!空姫さん!」
金持ちの人はとても興奮していた。

「あつ！お兄ちゃまおはようです^^」

「お兄ちゃんおはよう^^」

「お兄様^^おはようございます^^」

「兄貴・おはよう／＼／＼／＼／＼」

姉妹全員がいつせいに誉雅にあいさつした。

「おはよー」

「なんと！男ですと！」

「私達のお兄ちゃんです^^」

「そうですかー！それは何よりです！さあー！空姫さん！僕と結婚してください！」

「無理に決まっていますわ！私は好きなのはとても美しい物！それだけですね！」

それなのにあなたは何ですの！汚い格好で私に会いませ^{わたくし}んわ！」

「ガーーーーーンッ」

金持ちの人はめっちゃ落ち込んだ。

「でこの人誰？」

誉雅が聞くと。

「僕は、空姫さんと結婚の申し込みをしている、^{かみ}守と申します。」

「ふゝん・俺は空姫の兄の桜宮誉雅よろしく^^」

「／＼／＼／＼／＼！なんてお優しい方！なんでしょう！もう決めた！」

守が何かを決めたらしい。

「誉雅さん！」

「はい？」

「僕と結婚してください！」

「はあ！？。」

守は誉雅に結婚の申し込みを頼んだ。

「俺男！」

「それは承知の上です！お願いします！僕と結婚してください！」
「悪い、俺男だし、まあーお前が女だったらしてたかな^^」

【8話 次女の点滴&ライバル?】（後書き）

次回よろしく。

【9話 次女の点滴&ライバル?】（前書き）

どぞ!!!!!!!!!!!!!!

空姫「見ないと損ですわよ!」

【9話 次女の点滴&ライバル?】

「はぁゝゝ寒ッ!」

「お兄様!一緒に散歩してもいいですか?」

「おう^^」

「ありがとうございます^^」

「って空姫一つ聞いていいか?」

誉雅が改まって聞いた。

「はい?なんででしょうか?」

空姫は普通の接した。

「何でお前俺に敬語なんだ?」

「それは、私の大好きなお兄様からですよ^^」

「そつか^^」

誉雅は笑った。

「!ちよつと待って!誉雅さんは僕のものですよ空姫さん!」

「はぁゝまたあなたですの?守!」

「僕は誉雅さんを振り向かせるまでは諦めませんよ!」

「!?!俺ちよつと気持ち悪い。。。」

誉雅はちよつと気持ち悪そうな顔をした。

「俺は男だゝお前みたいにホモじゃない。」

「僕は運命と感じた人全員!僕は大好きなのです!」

「お前ちよつと最低だな。」

「!?!お兄様?」

誉雅は言った。

「誉雅さん?今なんと!」

「だからゝゝお前って最低だなんて。」

「!?!誉雅さん!」

「俺、そんなに何でもポイする人間大嫌い。」

「!?!。。。。」

空姫は反応してしまった。

「お兄様・・・ごめんなさい——！」

空姫はどっかに行った。

「空姫！」

誉雅は空姫を呼んだけど、空姫はその言葉が聞こえずどっかに行ってしまった。

「はあ・・・守、俺はもう帰る。」

「あつ！誉雅さん！」

「もう、俺に付きまとうな、お前が不幸になる・・・。」

「えっ？・・・。」

誉雅さん・・・今なんて・・・？。

誉雅はその冷たい言葉を言っ、どっかに行ってしまった。

「公園」

「私は駄目ですわー、私は何でも人をポイですわ。」
わたくし

しかもそのことは昔からずっと・・・なぜか私は人をポイするのが大好きなのですわ。

けど、お兄様だけは！取られたくない！・・・。

空姫は急いで家に帰った。

「あれ？・・・お兄様？・・・！？守も一緒！」

空姫は壁に隠れた。

何話してますの？よく聞こえませんか！・・・。

「一方」

「守、お前それ本気で言ってるのか？」

「はい、僕はいつでも本当のことしか言いませんよ、誉雅さん^^」

「俺は多分、彼女が居る。俺今記憶ないから何にも思い出せない。」

誉雅は悲しい顔をした。

そしたら、守が

「！？・・・。」

誉雅の手をつかんだ。

「僕は、あなたのそばに居たいです・・・。」

「?!. . .」

守は真剣だった。

パシンッ!

「俺はお前を好きにはなれない. . . 悪い。」

誉雅はそのまま走ってどこかに行ってしまった。

「僕はあなたを諦めない. . .」

「お兄様. . . あなたはやっぱり. . . 強い人ですわ. . . だけど. . . 私. . .」

「あなたとは. . . もう一緒には居れない. . .」

【9話 次女の点滴&ライバル?】（後書き）

次回よろしく！

【10話 約束】（前書き）

どぞ!!!!!!

10話行きましたw w

結構早かったかな？w w

【10話 約束】

「約束ですの?。」

「そうです!約束しましょう^^」

「いいですけど、私はすぐ、破ってしまいますわよ。」

「大丈夫ですよ!俺は空姫さんを信じていますから^^」

どうしても・・・約束は守れなかった、守れた約束はお兄様の約束だけだった。

初めてこの家族になったのは、とてもいやだった

お兄様は無口だった、樹姫だっていつも一人でした。

3人だった時は皆バラバラでいつも部屋にこもったりしていた。

それがいやで10回くらい家から飛び出したことだってあったけど、すぐ見つけれられる、だけど、お兄様は突然話しかけてきて

私にこう告げた。

「約束・・・しませんか?／＼／＼」

「約束ですの?、いいですけど?なぜ?」

「お前が・・・いつも・・・家飛び出すから／＼／＼」

「どうして?顔を赤く染めますの?」

「俺・・・口下手だから／＼／＼／＼／＼しかも・・・人見知りで・・・恥ずかしがりやだし／＼／＼」

「そうですの^^」

「お前今日初めて笑った。」

「それがどうしました?」

「可愛いなって思ってた^^」

「!?／＼／＼／＼／＼」

そうして私はお兄様に恋をした。

いつも、いつも、何でも私の事を心配と気遣ってくれた。凄く嬉しかった、嬉しかった半分不安もあった。

それはとても怖い夢。

お兄様が私から遠ざかって行くことが……。

ガチャツ

「空姫？どうかしたか？」

「お兄様……私は、もう……約束を守れません！」

「えっ？……約束？」

ズキッ！

「イテ！」

誉雅が急に頭の激痛に襲われた。

「お兄様！」

『約束！は約束だ！』

『お兄様、人見知りとか、恥ずかしがりやさんとかも口下手も治りました？』

『空姫が俺と話してくれたからな^^』

『そうですか^^私は嬉しいですわ^^』

『俺もだ！^^』

「俺はお前と約束をした……。」

「思い出しましたの？」

「子供の時に、約束、だけど約束の内容は思い出せない。」

「いいのです、約束だけ、思い出してくれば。」

空姫は嬉しかったけど、寂しさもあった。

「お兄様、私お兄様が記憶に戻るまで、もうお兄様とは会いません。」

「えっ？……なんで？」

「お兄様の記憶に戻るからです。」

「えっ！？・・・ちょっと待てよ！空姫！」

誉雅は空姫の手をつかんだ。

「空姫！ちゃんと俺の話・・・。」

「お兄様のためです！・・・私は永遠にお兄様が大好きだから！だから！もう一緒に居れません！」

空姫は泣きながら言った。

「俺はそんなこと思っていない！」

「だけど心のどこかでは思っているのでしょうか！？」

「思っていない！」

「！？・・・。」

お兄様は強いだから私はそれに惹かれて行った。

「・・・もう・・・辛くなりたくない！」

「えっ？・・・。」

「お兄様が女の人といるといつも辛くなって、苦しい！それがいやだから！」

私は、もういやな思いをしたくない！」

「じゃあ！俺のそばにいろよ！」

誉雅が空姫を抱きしめた。

「話聞いてました！？」

「聞いてた！だから！俺のそばにいろ！」

「何で！？そうなるのですか！」

「俺が空姫と一緒に居たいから！！！！！！！！！」

誉雅はキッパリ言った。

「何で・・・お兄様のバカ・・・。」

空姫は泣きまわった。

「次の日」

「お兄様さつさとおきてください！」

「ん？空姫？俺もうちょっと眠い。」

「いいから起きなさい！」

「ZZZZZZ」

「起きろって言ってますの！……！！！！！！！！」

空姫は誉雅の耳元で怒鳴った。

「うるさい！鼓膜こまく破れる！」

「今のはお兄様が悪いのですか。」

「お前ちよつと生意気になったな。」

「そうですか？いつもとちよつと強めに行こうと思ひまして^^」

「お前ちよつと怖くもなった……。」

「失礼ですわね！」

「アハハハハハハッ。」

誉雅は笑いながら1階に行った。

「ちよつとお兄様！」

空姫は足を止めた。

『俺達の約束は……どんな時でも一緒！それがいい！決定！^^』

【10話 約束】（後書き）

次回もよろしくね！

【11話 長女の嫉妬】

私はの名前は『はなみやじゅぎ花宮樹姫』 22歳で今は家族と一緒に住んでいる。

ただいつもの家族はお兄ちゃんにべつたり。

私だって！お兄ちゃんにべつたりしたい！だけど・・・無理・・・恥ずかしいし・・・。

はあ・・・やっぱり嫉妬してるよね？こんな感情の私って何か変・・・。

「お兄様起してくるね^^」

すっかり性格も変わった空姫。

「散歩行つて来る。」

「お姉ちゃま私も行く！」

「おう^^」

桂と蓮佳は散歩に出かけた。

私は家事だけをやっていた。

「はあ・・・。。。」

「おはよー樹姫。」

寝起きのお兄ちゃんだ、今日もカツコイイなあ

「おはよう^^お兄ちゃん、よく眠れた？」

「おう^^。」

お兄ちゃん事故に合つて記憶が無いから家族みんなここに居るのだ。

「朝飯は？」

「いつもと一緒だよ^^」

「俺さ、樹姫の料理好きなんだよなあー」

「えっ？」

「すっげー美味しい！本当に嫁に貰いたいくらい^^」

「！？／／／／／／／／／／／／／／／／」

樹姫は顔を真っ赤にした。

「どうした？顔真っ赤だぞ。」

「何でもないよ！お兄ちゃん！^^」

お兄ちゃんその言葉は私にとってではめっちゃ嬉しい言葉！

「はい、ご飯だよお兄ちゃん^^」

「おう。」

そして誉雅が樹姫のご飯を食べた。

「美味い！やっぱり美味い！」

「ありがとう^^」

「おう！^^」

記憶がなくてもお兄ちゃんはお兄ちゃんだから。

「お兄ちゃん、今日は何かするの？」

「別にすることないし、家にいるぞ^^」

「じゃあさ！二人で出かけないかな？」

「何で？」

「久々にお兄ちゃんと話とかいっぱいしたいし^^」

「いいけど、行くか！^^」

「うん^^」

嬉しかった。

〓川辺〓

「お兄ちゃん本当にこんな所でよかったの？」

「うん。」

「はあゝ・・もうちょっと豪華なところでもいいのに」

「俺は樹姫と一緒にならどこでも楽しいかもな。」

「！？／／／／／／／／／／／／／／／／」

だからそんな事いわないでー！めっちゃ嬉しいから！

「樹姫、お前さあゝたまには俺とこんな風に外に出かけたりしようぜ。」

「うん^^」

「あれ？樹姫？」

「えっ？あつ！智！」

「何？彼氏？」

「いや・・違うよ・・。」

あれ？何で私こんなこと言っただろう？・・。

「へえくじゃあ誰？」

「お兄ちゃんだよ。」

「ふん・・お兄ちゃんと一緒だなんて気持ち悪いね。」

「！？・・。」

早く！どっかに行つてよ！・・。

「じゃあね。」

そして樹姫の友達は帰って行つた。

「樹姫？」

「お兄ちゃん、もう帰ろう^^」

「分かった。」

そして二人は静かな夜をただ静かに歩き続けた。

「樹姫？どうかしたのか？」

「別に・・何でも。」

「絶対嘘だな。」

「本当ですよ。」

「お前動揺しすぎ。」

「動揺なんて・・。」

「はあ・・本当にこんな妹を持つと兄が困る。」

何でいつも私だけがこんな目に！

「お兄ちゃんはいいいよね！私の気持ち何一つ分かってくれない！私の気持ちくらいわかってよ！」

樹姫が逆キレ。

「悪い・・俺冗談で・・。」

このままどうしたらいい！

【11話 長女の嫉妬】（後書き）

次回もよろしく！

樹姫『次回見ないと駄目だよお兄ちゃん！お姉ちゃん！』

【12話 行方不明】

朝 7 : 0 0

いつもなら樹姫が台所にいるけど、今日はいなかった。

「樹姫お姉様？あれ？どこに行きました？・・・ん？」

机には紙が置いてあつた。

樹姫が書いた物だった、手紙にはこう書いてあった。

しばらく家を出ます、探さないでください。

樹姬。

「何この手紙！ちよつと！ちよつと！心配するんですけど！」

空姫は混乱。

「どうしたのですか？空姫お姉ちゃま？」

「これ見てください！」

空姫が手紙を皆に見せた。

「えっ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「樹姫お姉ちゃまどこ行っただのですか!？」

「本当世話の焼ける姉貴たちだよ。」

「ちょっと蓮佳それは私を指していますの？」

「そうだけど？」

「ちよつとそれはどういふじやよー!」

「そのままの意味。」

「何ですって！あなたちよつとお姉ちゃんという存在をバカにしますわ！」

「それは良かったですね。」

「!? なんですって! あんたね元から生意気なのよ!」

「よく言われる。」

「ムカツ・・・・。」

蓮佳と空姫の口喧嘩。

「うつさい！黙れ！」

「！？。」

桂が大声で怒鳴ったら

蓮佳と空姫は啞然。

「今は樹姫お姉ちゃまの事が心配です。」

「携帯に電話でもしたらいいじゃん。」

「それいい！」

さっそく電話。

『もしもし？』

「あつ樹姫！」

『空姫！？どうしたの？』

「あなたが手紙残して家出て行っちゃたから心配して電話してるんじゃない！」

『あつ……。』

「今すぐ家に帰ってきなさい！」

『ごめん……。今すぐは無理なの……。ごめんね』ブチッ

「あつ！？樹姫！ちよつと樹姫！」

「私は今まだ帰れそうにない……。。」

【12話 行方不明】（後書き）

次回もよろしく^^

【13話 秘密と告白】

樹姫は3日ほどでは帰っては来なかった。

だから桜宮家はともピンチな状態に陥っていた。

部屋は散らかり、台所は洗っていない皿で埋まっていた。

冷蔵庫も何も入っていない。

「お腹空きました。」

空姫はお腹を抑えて言った。

「あたしだつて腹減った！」

「じゃああの人呼ぶますよ。」

「誰だよ？」

「この家の家政婦^{かせいふ}」

「えっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

誉雅はソファで寝ていた。

「知らなかったんですか？この家はお兄ちゃまと私桂の家ですけど

家賃や学費とかもすべてお兄ちゃまがはらっているんですよ^^」

「えっ！？お金あるの！？」

「えっーお兄ちゃまは、会社の社長なんですけど・・・。」

「えっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「あんまし、大きな声出さないでくださいませ。」

「あつごめんなさいですわ。」

ピンポン

誰かが家に来た。

「あれれ？もう来たの?!早くない?ああ、別に買い物してこなくて良かったのに!」

「大丈夫ですよ^^皆さんには健康な体を保って欲しいですから^^

^^

「!?!?。」

綺麗な肌に綺麗な黒い長い髪そして綺麗な緑の瞳・・・可愛い・・・

。

「こんにちわ^^」

「あつこんにちわですわ・・・。」

「・・・。」

空姫は素直にあいさつ、蓮佳は目をそらして黙っていた。

「誉雅さんはどうなさいましたか？」

「寝てるよ。」

「そうですか、では誉雅さんが起きる前に部屋を片付けますね^^」

「うん^^。」

「名前はなんと言つのです？」

「あつ！すいません、最初に名乗らなくて、初めまして之乃と申します！」

「よろしくね^^」

「はい^^」

そして之乃は掃除を始めた。

〓 2 時間後 〓

パチッ・・・。

「ん？・・・俺寝てた？。」

「あつ、誉雅さん起きました^^」

「？？・・・誰ですか？。」

「あつ・・・私は之乃と言います、誉雅さんの記憶はなくなるまではこの家で家政婦をしてました。」

「そうだったのか？・・・悪い全然覚えてない・・・。」

「いいんです・・・こうしてまた誉雅さんに会えた事が嬉しいです^^」

「そつか？まあゝあんまり無理すんなよ^^」

「はい。」

誉雅は私服に着替えた、そして外に出かけようとした。

「どこかに行かれるのですか？」

「ちよつと会わないといけない人がいるから^^」

「そうですか、どこまで？」

「公園くらいかな？じゃあ行つて来る^^」

「いつてらしゃいませ。」

誉雅は笑つて外に出て行つた。

「誉雅さん・・・ん？。」

之乃は何かに気づいた。

「これは誉雅さんの携帯？・・・あつ届けないと。」

ガチャッ！

之乃は家を飛び出した。

「公園」

「お兄ちゃん、良かった着てくれた^^」

「いちいち呼び出すなよ、呼び出すくらいなら家にでも帰つて来いよな、樹姫。」

「うん、お兄ちゃんに伝えることが伝えたら帰る。」

「？」

「お兄ちゃん・・・。」

「ん？何？」

「私、お兄ちゃんの事一人の女の子としてね、お兄ちゃんのこと好きなの・・・だから・・・。」

「付き合ってくださいはないな。」

「えっ！？・・・。」

「兄と妹が付き合つたらおかしい・・・だけど嬉しい。」

「えっ？」

「告白サンキューな！^^俺もお前の事大好きだからさ！だからいつまでもその気持ちをあり続けて欲しいかなあゝって駄目か？／／／／／」

「うん！お兄ちゃんが言うなら！／／／／／」

「ありがとな^^」

「あっ・・・。」

誉雅さんの好きな人は私じゃなくて……妹の樹姫さん？……
嘘！……。

【14話 恋人ごっこ?】

「あのっ！誉雅さん！」

「何？」

「あのっ！お願いがあるんですけど／＼／＼／」

「俺でよかったらいいけど。」

「あっありがとうございます！」

「えっと・・・私と・・・。」

「??」

「恋人ごっこしませんか？／＼／＼／／／」

「恋人ごっこ？何それ？」

「えっとですね、恋人のように何かいろいろするんです！」

「ふん・・・俺別にやってもいいけど^^」

「／＼／＼ありがとうございます！／＼／＼／」

誉雅が気軽にOKした、之乃はとても嬉しそうだった。

「じゃあさっそくデートでもすっかな？」

「あっはい！／＼／＼／／／」

二人は私服に着替えて出かけた。

「あっ／＼／＼／／／」

「何？恋人って手繋ぐもんだらう？」

「はい／＼／」

誉雅さんって結構大人って感じです・・・。

「でちよっと聞いていいか？」

「はい？」

「この恋人ごっこいつまでやるんだ？」

「一週間・・・駄目ですか？」

「別に俺はいいけど^^」

「^^ありがとうございます！」

二人は商店街とかもいろいろ回った。

「ああーってか之乃って名前だったよな？」

「えっ！あっはい！」

「じゃあ俺の事誉雅って呼べよ^^」

「！？／／／／／ドキッ／／／／／カァァァァ」

「お前顔真っ赤だぞ。」

「大丈夫です！」

「ちよつと待つてて。」

「えっはい。」

誉雅はどこかに行った。

「そこの彼女」

「えっ？」

「お兄ちゃん達と遊ばない？」

「えつと・・・結構です。」

「いいじゃん！今一人？」

「いいえ、連れがいますけど。」

「何？男？」

「あつ・・・はい。」

「そいつらより俺らといたほうが楽しいよ^^」

「ちよつ！放して下さい！」

之乃は不良に絡まれた、手をつかまれた。

「放して下さい！・・・。」

誉雅！・・・。

ドカツ！

「あんたら？何？」

グイッ

「！？・・・。」

「俺の彼女に触らないでくれる？」

「！？／／／／／ドキッ・・・。」

「チッ！」

不良はどこかに行った。

「之乃大丈夫か？」

「誉雅！怖かったです！」

「うわぁ！」

之乃は誉雅に抱きついた。

「之乃。」

「はい？」

之乃が顔を上げた。

「じゃあ一週間彼女としてよろしくな！^^」

「はい。」

やっぱり一週間は短すぎたかもしれないな・・・。

【15話 恋人ごっこ?】

「なあゝ之乃。」

「はい?」

「恋人同士つてさ、アーンで食べ物とか食うのか?」

「えっ!?・・・多分・・・」

「じゃあ俺にやれ!」

「えっと・・・。」

何か誉雅さん甘えん坊だな・・・だけど可愛い・・・。

「アーン／／／／。」

パクッ

「美味い!」

「!?／／／」

「ほれアーン。」

「あつ・・・パクッ。」

「美味いか?」

「はい^^／／／／」

「^^」

やっぱり楽しいな。

ドンッ!

「!?!」

「?。」

「お兄ちゃん!何してるの!」

「えっ?彼女という。」

「か、か、彼女――!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

樹姫は大声をだして驚いた。

「俺の彼女^^」

「だって之乃ちゃんって家政婦なんじゃ!」

「まあゝ家政婦だけど、俺と一緒に恋人ごっこしてる^^」

「えっ！？じゃあお兄ちゃん！私とも恋人ごっこしよう！」

「ってお前俺の妹だろうが。」

「そうだけど、いいじゃん！」

「俺は無理、さっさと家帰れ。」

「！？。。。」

樹姫は走って帰った。

「之乃？どうした？」

「いえ。。。」

「大丈夫だって、俺が之乃を守るからさ^^」

「！？／／／／／」

誉雅が之乃の頭を撫でた。

「だからさ、之乃は心配しなくても大丈夫！」

「あっ。。はい！」

やつぱり誉雅さんは優しい。。。だから私はそんなところに惹かれたのかも知れない。。。。

「誉雅さん。。。」

「ん？」

「ずっと一緒にいてくれますか？」

「おう！^^」

「！？／／／／／」

之乃は心の底から嬉しかった。

「私！。。。誉雅さんのことが。。。。。」

「ん？」

「反抗期かもしれませんね^^」
「そうかよ……。」

『今日が最終日なんだか……寂しいって言う気持ちかわいてくる……。』

【17話 記憶が戻った兄貴】

「うわぁ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「!?!?!」

ダンッ!

「どうしたの!? お兄ちゃん!」

姉妹全員が震えながら誉雅の部屋に来た。

「あれ? お前ら何してるんだ?」

「お兄ちゃん? 何言ってるの?」

「だって、今この家に住んでるのは俺と桂と家政婦だけだろう?」

「お兄様? それって記憶が戻ったって事ですか?」

「記憶? 何の事だ?」

「戻りましたわ!」

みんなが喜んだ。

「たくつ・・世話の焼ける兄貴だな。」

「でも良かったです^^」

「嬉しいです^^ お兄様が記憶を戻されて^^」

ぐうゝ・・・。

「悪い／＼／＼」

誉雅の腹が鳴った。

「ご飯にしよう^^」

「うん!」

久々に兄妹がそろって、朝ごはん。

「お兄ちゃん、本当に良かったですよ^^」

「泣くなよ。」

「泣いてませんよ／＼／＼／」

樹姫は頬を赤く染めた。

「まあ、まあ、お兄ちゃん、ご飯のお代わりいる?」

「おう^^サンキュ^^」

「ありがとー！蓮佳！」

「さすが！私の自慢の妹ですわ！」

「！？／／／／」

樹姫と空姫が蓮佳に抱きついた。

「だけど蓮佳たちのプレゼントは？」

「前もって買ったときましたよ^^」

「うう！行くわよ！樹姫！」

「うん^^」

こうして次回に続くのであった。

【17話 記憶が戻った兄貴】（後書き）

次回で最終回で

次回もお楽しみに！

【最終話 誕生日】

「私、あっちのお店行って来るね^^」

「うん！じゃあ私はこっちに行きますわ！」

樹姫と空姫が誉雅の誕生日プレゼントを買っていた。
家は蓮佳が樹姫の代わりの料理を作っていた。

「家」

「まだかなあ？お姉ちゃま達。」

「まあまだちよつとは掛かるだろうな。」

プルルルルルルッ

「ん？電話？」

「誰からですか！？」

「うわあ！あつ樹姫から。」

誉雅の携帯がなった、桂が誉雅に抱きついた。

「はい？」

「お兄ちゃん！何か欲しいものないかな？」

「うゝん・・別にないけど・・。」

「そう？じゃあ私が選んでいい？」

「おう。」

「うん！じゃあバイバイ^^」

樹姫が電話を切った。

「樹姫姉ちゃまからですか？」

「おう^^」

「蓮佳姉ちゃま！手伝うよ」

「じゃあ俺も。」

「駄目ですよー！誕生日の方は大人しくしててください^^」

「分かった。」

「1時間経過——。」

「ごめん！遅れちゃいました！」

「ごめんなさい！」

「料理はこんなんでもいいのか？」

「うわぁ！完璧！」

「ケーキは桂が作りました^^」

「桂！ありがとう^^」

蓮佳と桂のおかげで料理がすべて出来ていた。

「お兄ちゃん！」

「お兄様！」

「兄貴／＼」

「お兄ちゃま！」

『お誕生日おめでとー！^^』

「ありがとう^^」

姉妹全員が誉雅の誕生日を祝ってくれた。

「じゃあ私からお兄ちゃんに^^、はい^^」

「あけていいのか？」

「うん^^」

誉雅がプレゼントを開けた。

プレゼントはマフラーだった。

「それは、私の手編みだからね！^^本当は自分の買い物行つてたの、ごめんなさい。」

「ありがとな！俺大切にするから！」

誉雅は嬉しそうだった。

「お兄様！はい！」

「ありがとう。」

空姫のプレゼントを開けた。

プレゼントは写真立てだった。

「この写真立てで家族の写真を飾って欲しかったのです^^」

「空姫・・・ありがとう^^さっそく写真飾るから^^」

「はい^^」

誉雅も空姫も嬉しそうに微笑んだ。

「ほら／＼／」

「ん？」

「たいしたものじゃないから／＼／捨ててもいいからな！／＼／」

プレゼントの中身は黒と青のヘッドホンだった。

「俺の好きな色知ってたのか！？」

「別に・・・兄妹なんだし・・・当たり前だろう／＼／／／」

「ありがとな！絶対捨てないから^^」

「！？／＼／あつ・・・おう／＼／／」

誉雅は嬉しくなり蓮佳は頬を赤く染めていた。

「お兄ちゃま！私からはこれです。」

「ん？」

「デートしてあげる券です^^」

「アハハハハハハッ・・・桂だったら。コスプレだと思ったぜ！

^^」

「なんですか失礼ですよ！」

「まあ・・・デートしような^^」

「はい^^／＼／／」

誉雅は姉妹のプレゼントを大切に大切に持っていた。

「お兄ちゃん！」

「お兄様！」

「兄貴！」

蓮佳、空姫、樹姫からは何か怖いオーラが出ていた。

「私達ともデートなさい！」

「うわぁ！ごめんなさい——！！」

平和な兄妹です。

カシャンッ・・・。

く終わりく

【最終話 誕生日】（後書き）

ありがとうございました！

他の小説もよろしく願いします！^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5146q/>

1人の兄貴と性格違いの4人姉妹——!? 5年後の兄妹

2011年2月25日23時47分発行